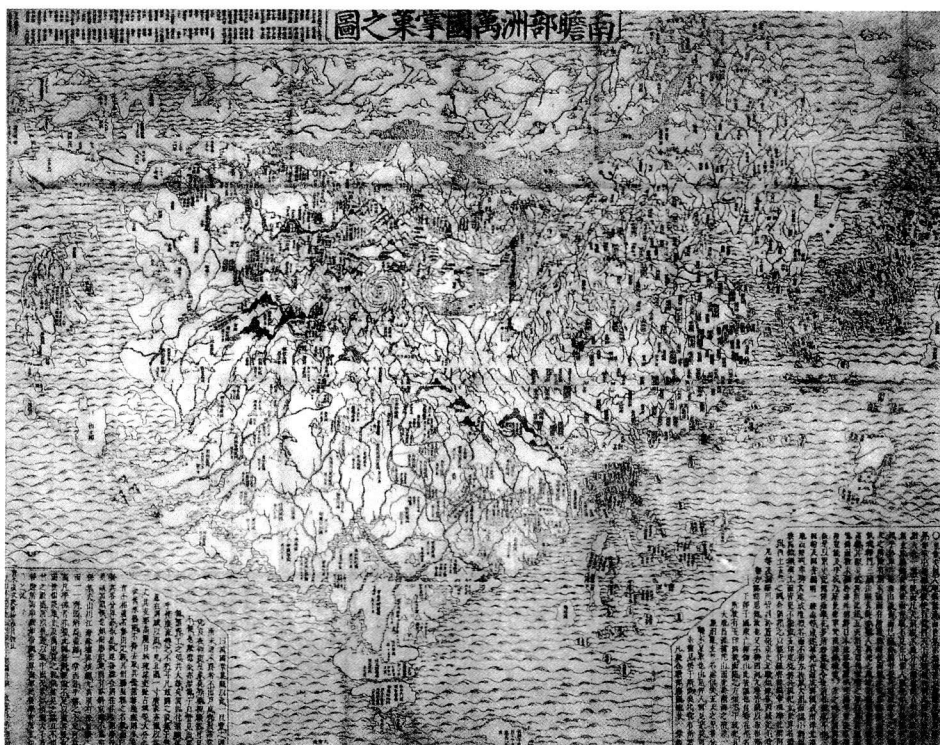


既製稿ですが、紹介させて頂きます。6月2日国土地理院と締めましたが、その前3ヶ年くらいは連載の冒頭と未了です。もし、この種のものに興味ある方があれば、連絡して頂ければ全編コピーをお送りします。なお、小生の父は、当分亡くなったのを幸い、6月18日～7月19日までバスタイン北野を歩かせてくれます。国土地理院広報 平成7年1月15日 第319号

国土地理院所蔵地図史料展観(Ⅰ)

なんせん おしゅうばんこくしやうかのず 南瞻部洲萬國掌果之圖

寶永7(1710)年、浪華子
(原寸×0.09)



国土地理院には、歴史ある博物館等に比べればまことに少数ながら、世に第一級品と誇るにふさわしい古地図・地理史料が保有されている。これらは、時に賓客に対して開披するほか、関係職員以外が目にする機会がなかった。地図情報館(仮称)の建設工事がようやくに始まった今、古地図の世界に親しんで戴くためにも、これらのうちの興味を牽きそうなものについて、紙上にて披露することと

なった。

* この図の製作者浪華子とは、京洛華嚴寺の開創鳳潭の雅号である。図は一色木版刷りで、横幅一・五メートルのまことに力強い存在感に満ちた地図である。図の内容は、古代インドにおける世界観を引継いだ仏教的世界観を表現したものである。標題の左には「此圖所據内外典目」として、多くの仏典のほか、史記、

漢書等の史書、山海經、水經注等の地理書、(大唐)西域記、法顯伝等の求法僧の見聞記等、総計一〇二部の古典籍名が示されている。

例えばその一つ、多くの仏典をもたらしした三藏法師玄奘の『大唐西域記』などによれば、宇宙の中心には須弥山が聳え、この周囲を七つの山と七つの海とが環状に取り巻いて、これらの外海に人の住む四大洲がある。その南のものが瞻部洲で、その中央に阿耨達池(チベットのカイラス山麓マナサローワル湖に比定、阿耨達はアルティン・タールグという湖水があり、ここから、恒河(ガンジス)、信度河(インダス)等の、アジアの(古代インドにおいては世界の)四大河川が流れ出ているとしているが、掲載図のほぼ中央に目立つ渦巻きの部分がそれである。

例を今一つ。紀元前二世紀、漢の武帝は西を脅かす匈奴挾撃の使節として、張騫を大月氏に派遣した。張騫は所期の目的こそ果たせなかったものの、一〇年以上にわたった困難な旅は、パミールの彼方の西域諸国の知識をもたらした。ここに東西交流が本格化した。彼の奏上、「于闐の東、水は東流して塩澤に注ぐ。塩澤は地下に潜行し、その南は則ち河源出ず、玉石多し。河は中国に注ぐ。而して楼蘭・姑師の邑は城郭あり。塩澤に臨む」(史記大宛伝)また、「蒲昌海は一に塩澤といふ。…広袤三〇〇里。その水は止り、夏冬水量は同じで、水は皆地下に潜行して南方の積石山に出で、黄河の源になる。」(漢書西域伝)タクラマカン沙漠の水がロブノールに集まり、それが伏流して星宿海に湧き出でて黄河の源となり、河源には古来珍重された玉を産するといふ、その後も長く伝承された壮大な黄河河源伝説のもとであり、この図の前述の渦巻きの右に、雲にまごうような表現の流沙

をよぎるようにして、このことがそれらの地名とともに簡潔に描かれている。

ところで、わが国では、この図の成立に先立つ桃山時代以降には、当時の西欧における地理的知識(五大陸等の概形は既知)を反映した、華麗な南蛮世界図屏風が各種製作され、諸大名や富裕層の居室を飾っていたことから、知識人の間には地理的世界観が普及していたはずである。一方、日本列島の形については見れば、その概形が姿を現わした幕府撰慶長日本図からはほぼ一世紀、民間でも同様の日本図が出版されていたにもかかわらず、ここに紹介した図に見る日本列島は、行基図の世界からそう進歩はしていない。

この図の成立の七〇年ほど前から鎖国政策は厳しいものとなっていたが、一方では西欧の諸科学は蘭学としてわが国にもたらされており、地理的知識も例外ではなかった。しかし、渡航することのできない外の世界は知識としては存在しても現実観に乏しく、仏説の説くところの世界観が一般には受け入れやすかったものであろう。なお、西欧の新知識を無視することも出来なかったようで、言訳のように、図の左端にはエウロパその他いくつかの国名が、日本の南には亞墨利加が島として描示されている。

今日の我々の目から見れば、荒唐無稽の感是否めぬものの、前二列のように、古典籍の数々に述べられた往時の知識とこの図を対照しつつ歴史地理の世界に想いを馳せるとき、たちまちに時の経過を忘れてしまうような地図の一つである。

参考

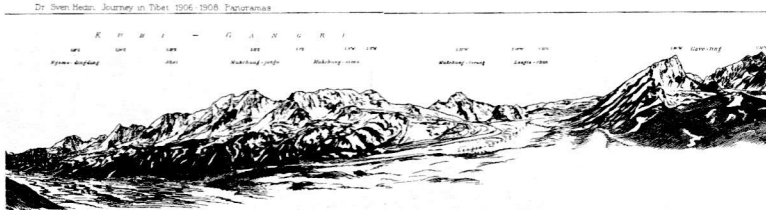
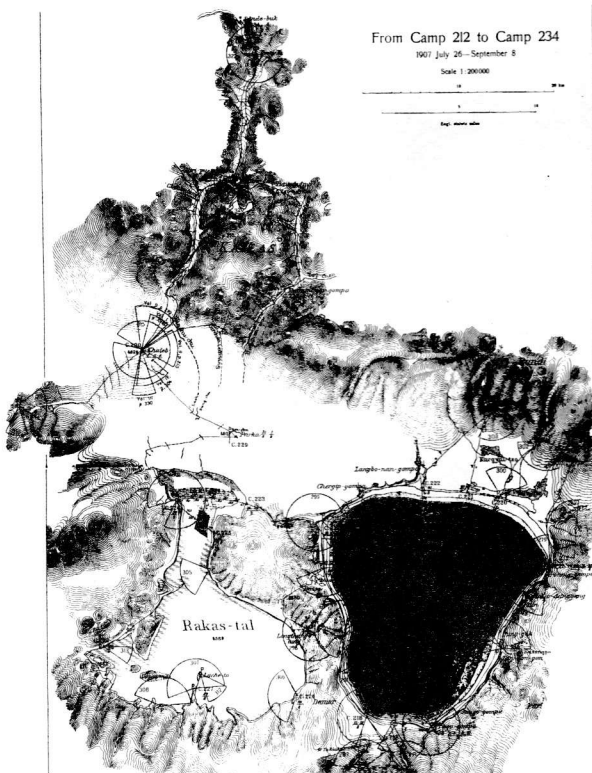
週刊朝日百科「世界の地理82」(織田武雄) 金子民雄「宮沢賢治と西域幻想」中公文庫 Aヘルマン(松田寿男訳)「楼蘭」東洋文庫 史記と漢書の訳文は長澤和俊によるもの (長岡正利)

国土地理院所蔵地図史料展観(II)

S.ヘディン『南チベット』全12巻

Sven Hedin Southern Tibet, 1916-22 ストックホルム刊

左は本書中の調査ルートマップ。カイラス山南麓マナサローフル湖の測深記録、円弧は宿営地での地形スケッチと写真の対象範囲。下はトランス・ヒマラヤ山中でのヘディンによる地形スケッチ。ともに一部を示し、左は原図20万分1×0.25 下方は全12巻の外観



本書は、スウェーデンの地理学者で中央アジア探検の第一人者、S・ヘディンによる第三次探検の記録であり、九巻のほか地図三巻からなる大著である。ヘディンは、一八九三年から単独で三回にわたって広く中央アジア、今日でいうシルクロードの地を探索し、「さまよえる湖」ロプノールや「楼蘭」遺址の発見など、数々の業績と不朽の名著を残した。その後は、一九二七年から西北科学考察団等を組織して、この地域の科学的探検を指揮した。晩年はナチスドイツ抬頭下の東欧にあって外交活動に没頭し、八七歳でストックホルムの自宅で逝去した。

以下に、本書の探検の帰途、日露戦争後の日本における講演の最後の部分を、少々長いが転載する。

なお、ヘディンは、この探検では南チベットの広大な地理的空白地帯を横断して、トランスヒマラヤ山脈を発見（山脈を計八回横断）したほか、インダス河、ブラマプトラ河等の河源の発見など、多くの成果を挙げている。

「予はこの學術的の探検に就ては終始予一人でこれを遂行したのである、別にこれについては助手をつれてあるのではない、従つて旅行中予の忙しきことは又一通りでなかった。先づ予は總て予の

探検線路の地図を出来るだけ精密に作らんと試みたのである、即ち是等の前人未踏の地を踏査しこれを世に紹介するに付ては、地図の製作はもつとも肝要なることであると信じたからである、予は探検線路の大部分は平板測量をもつて測圖しつゝ進んだ、先づ行程の距離を測るには、あらかじめ二百メートルの直線上を、或は駱駝に乗り或は馬に乗つて行進し、この全距離を進むに幾歩を要せしか、又何秒時を要せしかを測り、幾回かこの方法を繰返して其の平均数を求め、これを常に標準として行程を測りながら歩を進めた。また其の行進線路の方向は磁針によつて一々精細に測りつゝ進んだのである、然しながらこれだけでは誤差のあることは免れない、殊に日を重ねるに従つて其の差も多く加わつて来るから、予は時々一ヶ所に滞在して晴夜に天測を試み、其の地點の経緯度を精細に測量して圖上の訂正を行ひ、そしてこの行進中には、線路上の地物は勿論その兩側にある所のものは、出来るだけこれを精密に記録することを怠らなかつた、即ち遠方の山であれば其の頂點の方位を一々測定し、或いは湖水であれば其の周囲にある種々の地物を目標としてその形を書き、また其の水の淡・鹹（中略）…、一の山についても、其の名稱は處によつて違ふのであるから、各方面の土人に聞き正して其の名稱を記録して置いたのである、また途上に於て屢々種々の種族の住民に出逢つたが、なるべく彼等と言葉を交へ、其の土地の種々の地名などを聞き正し、また其の風俗・習慣等を知ることには注意した。また山を越える場合等に於ては、一々其の標高を測定した、（中略）…また峠の頂からは常に出来る限りパノラマ的展望圖のスケッチを作り、是には主要なる山岳の方位等を一々測定して記入しておいた、（中略）…

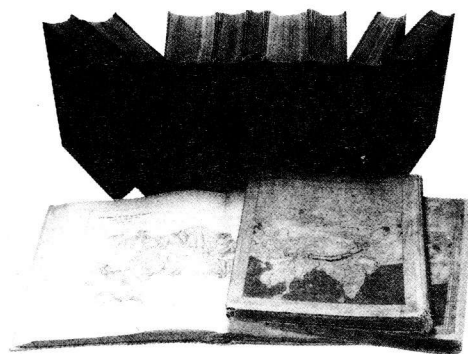
然も諸君が予の講演に向つて清聴せられたのは、予の最も光榮とする所である。また若し青年諸君等の中に本席の講演を聞き、予と志を同じてアジア大陸中猶残つて居る他の未發の地方を探索せんとする人が出来たならば、これは予の最も幸福とする次第である（拍手大喝采）（山崎直方訳述によるものを原文のまま転載）

文中に、地図作成への意気込みと真摯な態度、当日の会場での歓呼と熱気が伺われる。ヘディンの地図は、明治から戦前にかけて日本の陸地測量部がアジア内奥部を含めて作成していた東亜輿地図等の原資料としても使われ、戦後も米国AMSが作成した百万分一地図にはほぼそのまま利用された。これらは、地理的・民俗的資料としての価値のほか、今日の衛星測量の時代となつても、地図入手の困難な地域の故に、なお現地を知るに唯一のものとしての存在価値を持っている。

参考

深田久弥ほか監修『ヘディン全集』全二巻・白水社（一九六四）
金子民雄監修『スウェーデンと楼蘭王国展』（図録・一九八八）
長岡正利『百万分一東亜輿地図』（一九九一・『地図』三回連載）

（長岡正利）



国土地理院所蔵 地図史料展観

(XXXXVII・最終)

新京都市計畫圖

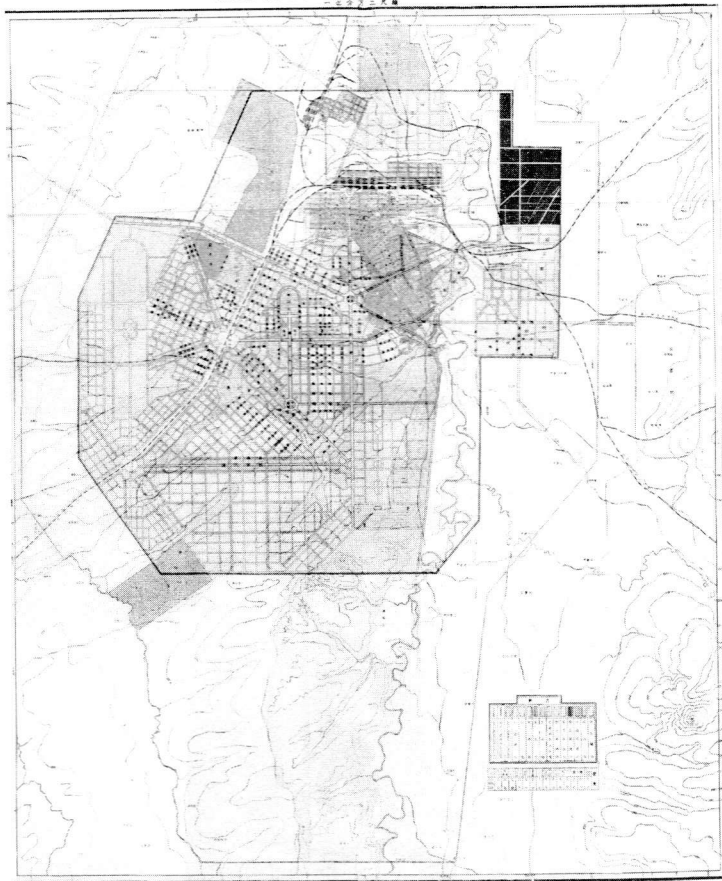
内題；満洲國新京國都建設計畫圖

付、『新京都市計畫概要』(満鐵經濟調査會, 昭和7年)

國務院國都建設局發行, 大同2年(1933)
2万分1, 印刷図, 109×89cm(×0.11)
基図は1万分1空中写真測量図の縮図,
等高線は中華民國製5万分1地形図による。

このシリーズでは、わが国が外邦地域について作成してきた各種の地図についてはまだ説明していなかったため、最終回としてその例を一点。
紹介の図は、一九三三(昭和七年)に、現在の中国東北地方に建国され、十三年間だけ存在した幻のような国、満洲国の首都、新京の都市計画図である。
満洲とは、中国の清時代に使われ始めた民族名であり、後に地方名としても使われるようになった。日本は、満洲事変(一九三二)を契機として、この国を擁立したが、関東軍司令官が政治と軍事の全権を握る植民地的傀儡国家であった。その現地事情は、建国の理想「五族協和」とは裏腹のものとなったため、中国全土

満洲國新京建設計畫圖



における民族的屈辱感からくる排日運動は、一九三七年の事変後に一層厳しく、さらに歴史は日米開戦に続いて、その国家は日本の敗戦とともに消滅した。
建国にあつての首都は、当時の中心都市で軍閥の拠点でもあつた奉天(現・瀋陽)を離れた長春とされ、新京と改称された。その頃の長春は、帝政ロシアが建設した東清(支)鉄道(ハルビン経由でシベリア鉄道へ続きモスクワに至る)と、日本が日露戦争後に割譲されていた南満洲鉄道との接続点にあたる人口十万人程度の街であつたが、ここ(図中央部や上の一角)を含む約八十平方キロメートルの大地に、ヨーロッパの都市におけるような円形広場と格子状の街路を組み合わせた五十万人都市の計画が描かれた。
計画図の概要を見れば、既成市街地に接して、北東に工業地域、南西に行政・商業・住居などの地域をおき、広大な緑地・公園を配している。さらに、凡例に見るように、十二種の用途地域が定められている。日本国内では珍しかった下水道も計画され、市内交通は、騒音に考慮して無軌道電車(トロリーバス)とされているなど、斬新な試みが読みとれる。
また、新京のほか、奉天・大連・ハルビンなどの諸都市においても同様に、日本国内では考えられないような大規模な都市計画に基づき、莫大な資金と資材、人材を投じて国土の建設が進められ、国の威信をかけたような壮大な官衛などの建築が進められた。
上述の「理想」は空虚なものであつたかも知れないが、この地に渡つた日本人の中には、国内ではもう描くことも難しくなつていた夢を求め、満洲の理想を信じて新しい国の建設にあたつた人も多かったに違いない。その善意が軍に利用され、結果として侵略に荷担して挫折していったこともまた事実ではあるが。

それらの希望を抱いた人々の、見果てぬ夢の結実であるかのように、現在のこの地は、豊富な資源を利用した工業と農業の中心地となつている。往時の都市計画はそのまま現在の市街となり、荘重な建造物が今も健在の例も多いという。

ところで、明治中期以降、日本が近隣諸国への侵略的政策をとるとともに、軍の作戦や統治上の必要から作られた膨大な各種地図がある。その作成範囲は、日本周辺に始まってアジア大陸内奥部に、さらに対外政策の変化とともに、西太平洋周縁の広域に及んだ。外邦図として一括されるこれらの地図は、秘図扱いのものも多かったため、その全貌は必ずしも明らかではない。敗戦時に三宅坂の参謀本部にあつたものは、陸軍士官学校若手教官らが、軍機密書類焼却の煙火の中を大八車で搬出したと伝えられている。占領(進駐)軍の接収を免れたそれらの地図は東北大学に現存するが、複数部数あつたものは近年になって国立国会図書館や国土地理院などに譲与された。

今は静謐の中にあるこれらの膨大な地図群の存在を想うとき、あの渺漠とした大陸にあつて、落日の美しさに見とれつつ苛酷な条件下で地図作成を進め、或いは散華した人々のこと、内地にあつては明日をも知れない敗戦後の惨苦と荒廃の中で、これらの地図を後世に伝えようとした人々のあつたことを忘れるわけにはゆかない。

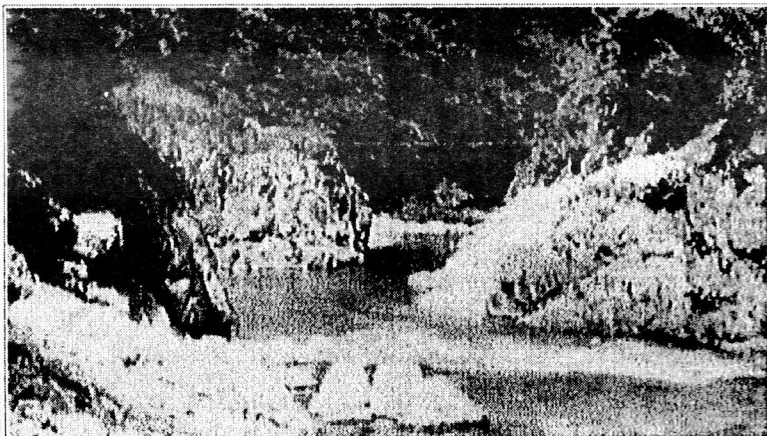
参 考

- 児島襄『満洲帝国』文藝春秋(一九七五・七六)
- 小峰和夫『満洲(マンチュリア)―起源 植民・覇権―お茶の水書房(一九九一)
- 長岡正利『陸地測量部外邦図作成の記録』『地図』31巻4号(一九九三)
- 太平洋戦争研究会『図説―満洲帝国』河出書房新社(一九九六)

(長岡正利)

小屋便り

犀川上流にはかつて倉谷4ヶ村があった。現在はそのすべてが無人となった。



ここがどこか分かるでしょうか？

中央に吊り橋が見えます。両脇に岩が突き出ています。
そうです。ここが犀川ダム建設地点です。犀川ダムができる前はこんな所だったのです。



ここは二又地区。

中央下のほうに橋が見える。

二又は倉谷川と二又川が落ち合う場所にあった部落である。この地区がダムの底に沈み、倉谷部落は沈まないものの孤立してしまうためやむなく全部落を放棄した。



ここは二俣新町。

かなりの個数の家がみえる。これはすべて犀川ダム建設によりダムの底に沈んだ。その沈む直前の村の様子。当時200人ほど住んでいたらしい。

ダムの水が渇水でほとんどなくなると、今でもその家屋の一部を見ることができる。



日尾地区

このほかに犀川を挟んで対岸に見定という部落があった。

これら倉谷・二又・日尾・見定の4村を倉谷4ヶ村とかつては呼んでいた。

「自然人」NO. 48 (橋本確文堂) のコピーです。
p. 78からご覧下さい。

Vol. 6

第2特集

はやし・しょういち

1936年金沢市に生まれる。「郷土の山を知ろう」をテーマに金沢ナカオ山岳会を設立、現在代表会員。環境庁自然公園指導員、石川県自然公園巡視員を務める。「白山を歩く」など自然関係の著書が多数ある。

●大門山と奈良岳

登山口は富山県福光町と上平村との境にあたるブナ峠にある。ブナ峠への県道は通行止めが多い道なので、道路の状態を福光町役場か上平村役場へ問い合わせから行動する。

峠からブナの木が茂る尾根道を赤摩木古山との分岐までたどる。そこで右手の道へ入ると大門山頂上へと導いてくれる。

「魔の滝」のイメージが強い。コースの大半は沢沿いに歩くので、かなりの登山経験が必要だ。

高二郎山への登山道である長尾根を登り、口ボット雨量観測所への道へ入り、下り切った場所から左手へ入る。イワナ釣りの人が入っており、その踏み跡をたどってト谷へ下る。滑りやすい谷なので注意して下ろう。滝がかかっている場所は右側を巻く。

奈良岳へは先ほどの分岐まで戻り、尾根筋につけられている道をたどる。最初のピークの赤摩木古山は眺望がよい。一般の登山者はここで引き返したほうがよい。

急坂を下ったところの右側、倉谷川源流部のバシヨバ平にはミズバシヨウの群落が見られ、



写真2 犀川の山はどこを向いてもブナばかり。新緑と秋の紅葉がよい (撮影/中村和男)

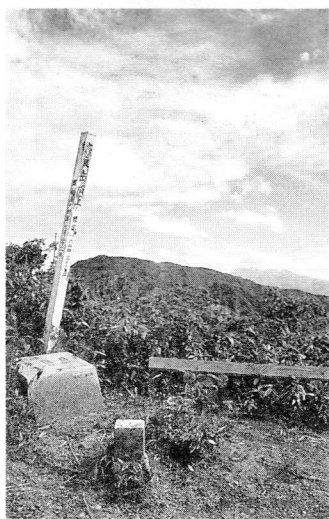


写真3 犀奥の盟主・奈良岳の頂上。奥に大笠山と白山が見える (撮影/中村和男)

二ツコウキスゲやコバイケイソウも多い。
続く見越山までの間は、石川県側はブナ林だが富山県側は視界が開ける。見越山に近づくと花も多くなり、眺望もよくなる。
奈良岳へはいったん下ってから登り直す。急な下りがあつてチシマザサが茂る道を登る。登りが緩くなるとほどなくして石仏をまつつてある山頂に着く。大笠山や白山などの眺望がよい。

※犀奥

「犀奥」とは、山岳会グループ・ナカオ(現、金沢ナカオ山岳会)が昭和四十八年(一九七三)に「なかも犀奥(犀川源流)特集」を発行して以来、使われていた言葉である。厳密な犀川源流域より広い範囲をさす呼称として使用される。

◆金大ワングルと犀奥の山

金大ワングル(金沢大学ワンダーフォーゲル部)が結成されたのは昭和三十三年(一九五八)、設立当初は医王山や白山に目を向けていたようだ。医王山や白山にそれぞれワングル道を開設している。

金大ワングルが犀奥の山に関心を示すようになったのは昭和三十八年ごろからである。医王山が有料化され活動の場を犀奥に求めたのが一因である。その拠点となる山小屋を倉谷に昭和三十九年に設置、翌年に高二郎山へ登る新道(長尾根・クラコシ尾根)を開設した。以後、犀奥ルートや、高二郎山・見越山間(現在、廃道)、奈良岳・大門山間(現在、富山県が整備)の登山道を開設、山小屋・ベルクハイムも二度改築している。金沢市域から登れる唯一の犀奥の山、高二郎山への登山道整備を現在も行っている。

林 正一(金沢ナカオ山岳会)

犀奥の山登山ガイド

林 正一(金沢ナカオ山岳会)

金沢の市街地を流れる犀川の流域には、最高峰の奈良岳を中心にして富士山に似ているところから「加賀富士」といわれる大門山、三つ峰のアルペン的な山容の高三郎山などの山がある。それらの山を総称して「犀奥の山(※)」と称している。かつては「秘境の山」であつたが、近年になつて全国の登山者の目にとまるようになり、登山口に県外ナンバーの車を見かけるようになつてきた。

●倉谷集落跡と高三郎山

犀川沿いにさかのぼると、車は犀川ダムで行き止まりになる。以後、ダム湖の右岸(向かつて左側)にある歩道をたどる。道の両側はタニツギが並ぶので五月の花ときは美しい。途中のブナ林は、ダム湖に沈んだ「又集落を雪崩から守ってきた林の名残である。足場の悪い崩壊箇所を通るので、足元に注意してほしい。

ダム湖に架かるつり橋を渡り、左手へ行くとほどなくして倉谷の集落跡に出る。石垣や石碑に集落の名残を感じることが出来る。集落跡より上流へ少し行くと金沢大学ワンダーフォーゲル部の山小



写真1 犀川ダムに近づくくと前方に形のよい高三郎山がそびえる(撮影/舟田節子)

屋・ヘルクハイム(非公開)がある。この下あたりは広場になつていたので憩うのによい。ハイカーは、このあたりで引き返している。

倉谷川沿いにさらにさかのぼる。金山谷を渡つた所に長尾根とクラコシ尾根を経由しての高三郎山登山道があるが、この先にあるコシアゲ谷を渡つた所のシヤクナゲ尾根につけられた道のほうが登りやすい。とはいふものの、急坂の箇所がかなりある。ホンシヤクナゲの群落が見られ

るのが高三郎山の魅力、標高九〇〇メートルを超えるあたりから目に入る。クラコシ尾根を経由してきた道と合流すると登りは一層急坂となる。シヤクナゲの開花期である五月中旬ころは雪上歩きである。着いた頂上は雪で覆われているときは広いが、夏から秋にかけては三角点の周囲は背丈以上のチシマザサに囲まれていて眺望はよくない。

下山は合流点まで戻つて左のクラコシ尾根の道へ入る。この尾根もホンシヤクナゲが多い。岩が露出している場所もあるので足元に十分注意してほしい。ブナ林に入ると長尾根との合流点に近い、砺倉にある口ポット雨量観測所への分岐で右へ入る。しばらくはブナ林の下りが続き、ユキツバキが目立つてくるようになると急坂に変わる。この下りは疲れた足にはこたえる。金山谷へ下つた後は来た道に戻る。

●犀渾

犀川の源流のひとつである「又川」にかかる滝で落差三十メートルほどある。遭難者を出したこともあつて

◆倉谷の歴史

寿永三年(一一八三)、砺波山の合戦で敗れた平家の落武者が住んだと伝えられている。倉谷が記録に登場してくるのは、前田利家が金沢城へ入城してから。利家が水を献上し、佐々との戦いの際に陣屋設営にあつたとある。そして三百年もの間、金銀を産出した鉱山の歴史が倉谷に花をそえる。慶長十三年(一六〇八)に最初の発掘が行われた。その後数度の休鉱と経営者の交替があつたが明治四十三年(一九一〇)まで続き、最盛時には四百戸もの家が並んだとされている。

昭和十六年(一九四二)一月、倉谷鉱山再興の試掘が始まつたものの七人が雪崩の犠牲にあい死亡、その葬儀の場へも雪崩が押し寄せ十四名死という惨事に見舞われた。鉱山の再興はならなかった。犀川をせき止めての多目的ダム建設が進み、昭和三十八年(一九六三)十月、住み慣れた古里を離れ全戸が金沢へ出た。

林 正一(金沢ナカオ山岳会)

うえうま・やすお

1951年兵庫県生まれ。金沢大学大学院理学研究科（生物学専攻）修了。山歩きとネイチャー写真が趣味。著書に「白山の四季」シリーズ、「山と高原地図・白山」（共著）など。

繁殖期にあたる五月から六月には、寺津から倉谷までの範囲ではホオジロとヒヨドリが非常に多く、全個体数の約二分の一を占め、次いでウグイス、ヤブサメ、オオルリが多いことが分かった。

また高二郎山の登山道では、コルリとウグイスが比較的多く（全個体数の約三割）、次いでシジュウカラ、ヒガラ、カケスの順となっていた。ホシガラス、ウソ、コマドリ、ヒンズイ、クロジなど、本来はより標高の高いところを中心にすんでいる鳥も見つかった。

△イヌワシとの出会い

鳥類個体数調査の中で何度か見ていたイヌワシだが、一九七四年の五月の出会い、その後の私の進路に大きく影響することとなった。巣の発見と雛の巣立ちを確認することができたのである。その三年後から、県の調査としてこの鳥を調べることになり、多くの後輩の協力を得て、この地域に二つがいていることや、それらの行動範囲をつかむことができた。

イヌワシの存在は、それを支える餌となる動物（フウサギ、ヤマドリ、ヘビ類など）、そしてこれらの動物を支える生き物など、この

地域の自然の豊かさの証といえるだろう。見つけたい方は、犀川ダムから周辺の山の稜線を注意深く観察していると出会うはずである。

△ニホンザル

この地域では、昭和の初めから記録がなかったが、一九七一年ころ成ヶ峰付近で発見され、私の鳥類調査時期（一九七三～一九七六年）に、高二郎山のクラコシ尾根で糞や姿を何度か見ており、一九八一年五月には同じところで少なくとも九頭を確認した。一九九二年六月と一九九三年六月には、犀川の上流および奈良岳や見越山周

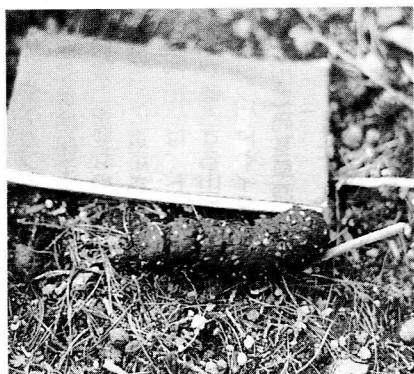


写真7 ニホンザルの糞
1976年8月12日、クラコシ尾根で9個連続して見つかったうちの1個で、姿も確認した。

辺で姿や糞、食べ跡を複数確認した。また、一九九六年五月には高二郎山のナガ尾根で、連続して新しい糞を見ている。

一九九八年二月には、滝澤均氏（いしかわ動物園）により犀川ダム下流の左岸で四十頭が数えられている。犀川源流地域に複数の群れがいることは間違いない。

△その他の動物

カモシカはここ三十年で数が増え、近年はダムよりはるか下流の集落周辺で普通にみられるようになっていた。

ツキノワグマは、毎年、春の有害鳥獣駆除の時期に何頭か捕獲されており、ブナにつけられた爪痕などが判断すると、この地域全域にすんでいるが、数はあまり多くないようだ。

この他、希少な動物としては、ヤマネ（一九七三年クラコシ尾根）、オコシヨ（一九七三年五月シヤクナゲ尾根）、カワネズミ（倉谷）を目撃している。

上馬康生（白山自然保護センター）

◆犀川源流自然

環境保全地域

犀川源流域一帯は、昭和五十二年（一九七八）に県の自然環境保全地域に指定されている。面積は八一一・五畝で、全域が特別地区となっており、土地の形状変更や木竹の伐採等が禁じられている。区域は五十一ページの図のとおりであるが、白山国立公園区域とは奥三万山と奈良岳を結ぶ尾根および見越山にかけての石川・富山県境接線で接している。

また、平成十年（一九九八）には、大阪営林局が自然環境保全地域を含む一九九四畝の国有林を「犀川源流森林生物遺伝資源保存林」に設定した。これは、生物資源を保存するため、良好な自然林をそのまま残そうというもので、一九九九年五月現在、全国で十カ所が設定されている。さらにこの区域は、環境庁が指定する白山国立公園保護区の一部であるほか、千鈞以上の源流域に人工物や伐採地がない「原生流域」にもなっている。

このように、犀川源流地域は、白山地域と一体であり、県内で最も原生的な自然が残る極めて重要な地域であるといえる。

（石川県環境安全部自然保護課）

とが・のりまさ

1955年金沢市生まれ。金沢大学ワンダーフォーゲル部時代から白山山系の山を中心に登り続けている。石川県自然保護課勤務。著書に「白山花ガイド」「山と高原地図・白山」(共著)など。



写真4 ゴゼンタチバナ
見越山から奈良岳にかけては、亜高山性の植物がみられる

またがる自然度の高いブナ林となっている。また、高三郎山や県境稜線の瘦せた岩がちの尾根には、ヒノキやクロベ(ネズコ)、キタゴヨウなどからなるクロベ・ヒメコマツ林が成立し、林床にアカミノイヌツゲやホンシヤクナゲの群落を伴うことが多い。

さらに、奈良岳や見越山の山頂付近をはじめ、局所的にダケカンバやオオシラビソなどの亜高山帯植生がみられる。これらの三つの

植生(ブナ林、クロベ・ヒメコマツ林、ダケカンバ林)は、環境庁の自然環境保全基礎調査による「保護上重要な植物群落(特定植物群落)」に選定されている。

溪谷部には、トチノキやサワグルミが優占する山地溪畔林がみられ、シシウドやイタドリなどからなる山地高茎草原も発達している。

また、特筆すべき植生として、赤摩木古山・見越山間の湿地にみられるミスバシヨウ、リュウキンカなどの群落や見越山山頂付近の湿った岩場にみられるニツコウキスゲ、コバイケイソウ、ヒメシヤガ、イワシヨウブ、カライトソウなどからなる群落があげられる。そのほか犀川源流域では、キヤラボク、オオヤマレンゲ、オオバツツジなどの稀少な植物が確認または記録されている。

梅 典雅(石川植物の会)

※チシマササ・ブナ群集
植生区分のひとつで、県内の白山山系に多いブナ林のタイプ。ブナやミズナラ、ミネカエデ、オオカメノキ、チシマササ、トクワカソウ、ツバメオモトなどの植物からなる。

●動物

犀川源流域は、気象、地形、植生ともに尾添川流域など白山北部の自然環境に類似していること、そして人工物がほとんどなく人の入山も限られていることなど、現在の良好な自然の存在に結びついていると考えられる。ここでは、比較的調査のできている鳥類全般とイヌワシ、そしてニホンザルを中心にお話しよう。

△繁殖期の代表的な鳥V

金沢大学の学生であつた一九七〇年代、私はワンダーフォーゲル部の山行や、卒業研究の鳥類調査のため、この地域へは季節を問わず



写真6 イヌワシ若鳥
5月下旬～6月に巣立つ

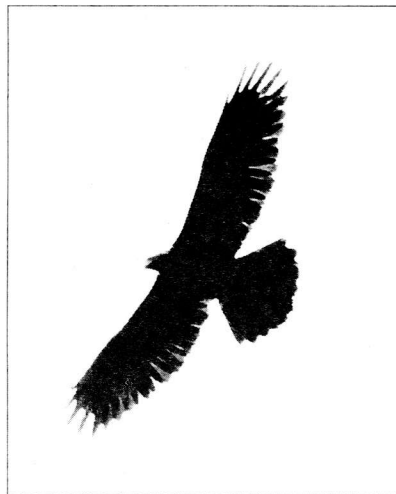


写真5 イヌワシ
犀川源流域には2つがいが見られている。

幾度となく通つた。犀川上流の寺津町から歩いて、犀川ダム、倉谷を通り、高三郎山の山頂までの間の鳥類個体数調査は、四十数回行つた。

その結果、九十六種を記録し、

犀川源流の自然

●位置と地形

犀川は、白山系の北端にあたる山々に源を発し、金沢市街を貫流して日本海に注ぐ全長約四十五キロ、流域面積約一千五百平方キロの二級河川である。白山の主峰、御前峰（二七〇二メートル）から北に延びる石川・岐阜の県境線は、北部白山地域とも称される三方岩岳（一七三六メートル）や笈ヶ岳（一八四一メートル）を経て、石川・富山県境となり、次第に標高を下げながら



写真1 犀川（二又川）源頭部 7月まで雪が残る（6月27日撮影）

医王山に連なっている。このうち、金沢市域の最高地点である奈良岳（一六四四メートル）や大門山（一五七一メートル）などの山岳が犀川の源流域を成しており、西は手取川水系の瀬波川および直瀬谷川、東は小矢部川および浅野川との分水嶺で囲まれた区域の水を集めている。

また、見越山（一六二二メートル）から高二郎山（一四二二メートル）に至る尾根によつて源流域は二分され、西を流れる本流の二又川と東を流れる倉谷川が犀川ダム湖の上流部で合流している。

一帯は、浸食の進んだ深いV字溪谷と瘦せた尾根からなる急峻な地形が大半を占める。二又川の源流部は、落差約三十メートルの崖を除いて比較的穏やかな溪相であり、釣り人もかなり入っているが、倉谷川の源流部は、滝や「廊下」と呼ばれる兩岸が切り立った絶壁が続ぎ、容易に人を寄せつけない峡谷である。

また、熊走大橋が架かるあたりは小規模ながら峡谷となっており、上寺津発電所から下流にかけてみられる河成

段丘の段丘面は集落や水田に利用されている。

●植生

この区域の標高は、駒形町の一七〇メートルから犀川源流域の最高峰である奈良岳の一六四四メートルまでの幅を持つているが、植生帯別の面積としては、大部分がブナ帯（二五〇〇～一六〇〇メートル）に属する。

犀川ダムから下流域では、水葉山（八九一メートル）や吉沢山（八〇〇メートル）などの山頂付近にブナ林

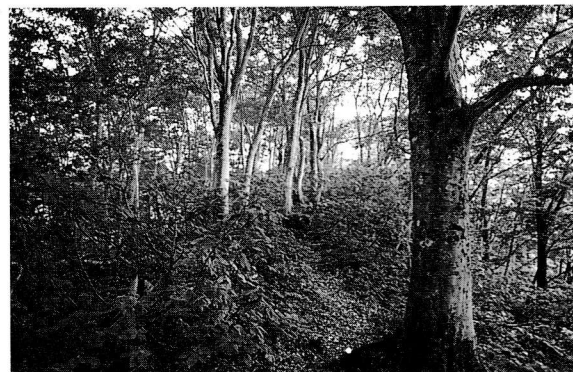


写真2 高三郎山ナガ尾根のブナ林（チシマザサ・ブナ群集）

が残るほかは、ミズナラなどの二次林やスギ植林が多く、河川部分にはケヤキやオニグルミなどの峡谷林もみられる。

犀川ダムから上流域では、ダムによつて廃村となった倉谷・二又の面集落で炭焼や林業が営まれていたため、集落の周辺から標高八〇〇メートルあたりまでは、ミズナラなどの二次林やスギ植林となつているところが多い。しかし、源流域の大半はチシマザサ・ブナ群集（※）が占め、直瀬谷川源流域に



写真3 高三郎山クラコシ尾根 瘦せた岩尾根にクロバエ・ヒメコマツ林が成立する（左下）

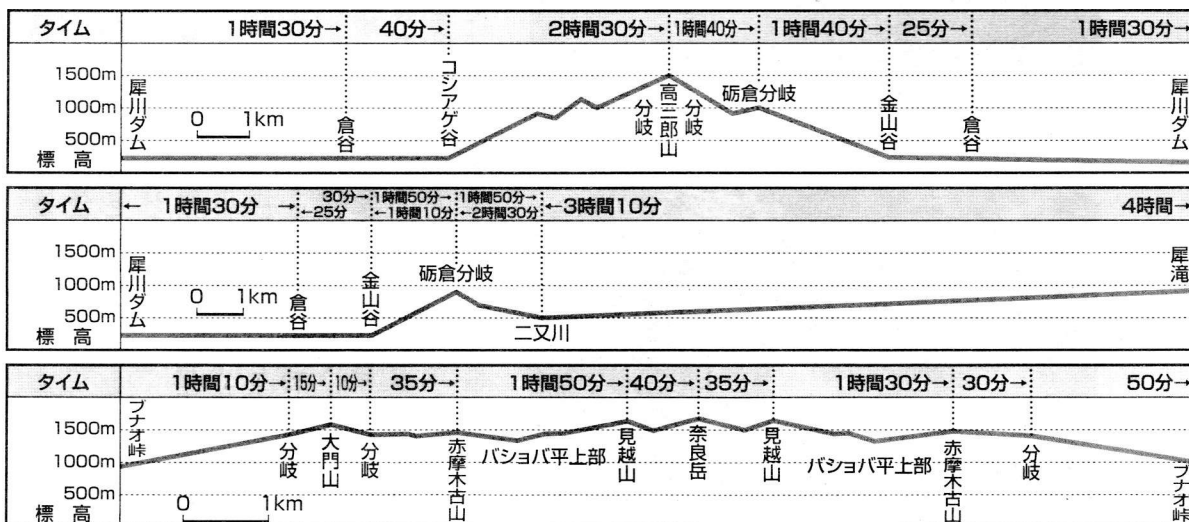
犀川源流案内図



高三郎山 の・はホンシャクナゲ、開花は5月上旬から中旬

見越山 の・はホンシャクナゲ、タチヤマウツボグサ、イワオウギ、カライトソウ、シモツケソウ、タカネナデシコなど

ハシヨバ平 の・はハクサンシャクナゲ、イワショウブ、ミズバショウ、モウセンゴケ、コバイケイソウ、リュウキンカ、ニッコウキスゲ、ヤマトキソウなど





犀川源流のシンボル「犀滝」
“魔の滝”と恐れられ、過去に
遭難者を出している(N)



高三郎山クラコシ尾根を登る(T)



五月の高三郎山を彩るホンシャクナゲ(高三郎山クラコシ尾根)(T)



秀麗な姿で知られる「加賀富士」大門山(高三郎山から)(T)



二又川の大淵(T)



見越山山頂付近に咲くニッコウキ
スゲ[右]とコバイケイソウ[左](T)

梅 典雅 (19期) 中村 和男 (金沢ナカオ山岳会)

上馬 康生 (15期) 舟田 節子 (金沢ナカオ山岳会・15期)

身近な自然再発見ガイド⑥

第2特集

犀川源流



大桑橋から望む犀川源流の山々
左から高三郎山、奈良岳(右は大笠山)
手前の山は、左が吉次山、右が拳原山(T)

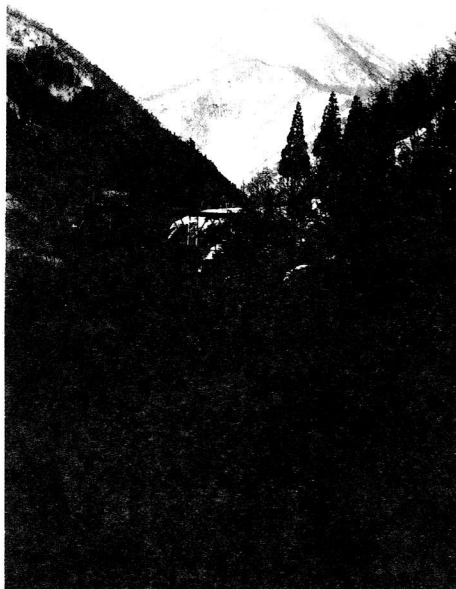
撮影/梅 典雅(T)
中村和男(N)



順尾山から望む犀川源流の山々 左:大門山 中:見越山 右:高三郎山(T)



残雪の犀川源流の山々 左:高三郎山 中:奈良岳 右:見越山(大笠山から五月上旬)(T)



熊走大橋付近の
犀川と水葉山(T)

初夏のころ、金沢の市街地から犀川の上流の方を眺めると、緑に染まる山並みの奥に、まだ雪を頂く白い峰々が目につく。犀川は、そういった山を源流とする川である。"流れゆたけき犀川や影静かなる浅野川"と金沢市民の歌に唄われるとおり、穏やかな浅野川を女川と表現するのに対し、犀川は男川とされる。このような二つの川の風情や性格を特徴づける要因のひとつに、源流域の違いを挙げることができる。

今回の特集では、犀川流域のうち、金沢市の駒帰町や熊走町より上流の一带(内川を除く)を対象として、その豊かな自然や登山コースなどを紹介しよう。(梅 典雅)